

人、至高性、星の時間

徐 丙鉄 (情報学科)

井上智洋「人工知能と経済の未来」 文藝春秋 (文春新書 / 2016年7月)

汎用人工知能とそれを搭載したロボットにより2030年頃から第4次産業革命が始まる。工場は人工知能とロボットで操業されるようになり、「純粹機械化経済」の時代が来る。工業製品が無尽蔵に供給できる「供給過剰時代」である。

2045年頃には知的仕事の多くが汎用人工知能で代替される。多くの人々が仕事から解放され、ベーシック・インカム (国から全員へ、月々一人当たり例えば10万円程度の支給) で暮らすようになる。そのような未来で人間は如何に生きるのか、この本の最終章はその考察へのヒントを提示する。それは「至高性」である。

「役に立つがゆえに価値があることは、役に立たなくなった瞬間に価値を失う。会計士の資格は会計ソフトの普及で、運転免許はセルフドライビングカーの普及で、英会話能力は自動通訳機の普及で、価値を失う。」

バタイユは「有用性」に「至高性」を対置させた。

「天の無数の星々は仕事などしない。利用に従属するようなことなど、なにもしない。」

ケインズも未来についてこう語った。

「われわれはもう一度手段より目的を高く評価し、効用よりも善を選ぶことになる。われわれはこの時間、この一日の高潔でじょうずな過ごし方を教示してあげることができる人、物事のなかに直接のよろこびを見出すことができる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人を、尊敬するようになる。」

野の百合 (新約聖書マタイ伝 6章 28節)

「野のゆりがどのように育つかをよく見なさい。ほねおることも、紡ぐこともしない。あなたがたに言うておく。栄華をきわめたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」

シュテファン・ツヴァイク「人類の星の時間」 (片山敏彦訳) みすず書房 (1972年)

進化論は「なぜこのように多様な種が存在するのか」という生物多様性への問いから始まった。そして、突然変異 (内因) と自然選択 (外因) で説明できることを発見した。つまり、生物の進化は種のみ (突然変異) で決まるのではなく、環境との相互作用 (自然選択) で決まる。故に進化は唯一無二、同じ進化は決して起こらない。歴史も同様であろう。個人の堅い意思と行動 (内因) と民衆による選択と受容 (外因) の相互作用で歴史は紡がれる。

歴史の相互作用の中でも、人類の歴史的分岐点となった稀有な出来事の瞬間、それがツヴァイクの「人類の星の時間」ではないか。

ツヴァイクは言う。「こんな星の時間——私がそう名づけるのは、そんな時間は星のように光を放ってそして不易に、無常変転の闇の上に照るからである。」「こんな瞬間は、・・・全人類の運命の経路を決めさえもする。」

1453年、東ローマ帝国の最後の宝石である「都コンスタンチノーブルを奪い取る」堅い決意を持つメフメト2世 (マホメット2世) の慎重かつ冷酷で大胆な決断と運命の悪戯のような偶然が歴史の歯車を一方に回し、ヨーロッパが後からいくら悔いても取り返すことができない出来事となった。

1741年、ヘンデルが卒中から奇跡的に回復し、メサイヤのハレルヤコーラスを作曲して、民衆に受け入れられる瞬間、彼はこの曲を神からの恩寵と認識した、この瞬間は星のように強烈な光を放つ。

1912年、南極点到達をアムンゼン隊に先行されたスコット隊は、落胆と絶望の中、帰路に遭難死する。救助隊が遺骸と遺言、そして乾板やフィルムを発見する。乾板やフィルムの映像を見、スコットの書きとめたことばを知って、世界は驚嘆し、イギリスでは王が英雄たちを追悼してひざまずいた。

この本は、人間とは何か、その至高性、大胆さ、愚かさ、残忍さ、を12編の世界史の「星の時間」で語らせる。

